

事例 18 日本最古の円形校舎を利用して プロフェッショナル人材が街づくりに挑む

● 企業情報

社名：株式会社円形劇場
本社所在地：鳥取県
従業員数：1人



● 採用したプロフェッショナル人材

はしづめ まき氏

年齢：42歳 家族構成：母、子ども1人
前職：現在もデザインスタジオを主催

プロフィール


1996年 ニューヨーク工科大学建築学部、大阪芸術大学建築学部卒業。大阪芸術大学大学院彫刻研究修士。
1999年 ニューヨークに約10年留学。現地の建築デザイン事務所、不動産会社に勤務。
2007年 都市をテーマにした現代美術の発表を開始。

拠点からの助言等

- 円形校舎を観光資源としてのみの活用ではなく、まちづくりにつなげていくことの重要性を共有し、人材像を明確化。
- 候補者を鳥取に招き、事業内容や取組の状況を詳しく紹介し、円形校舎の内部や倉吉市の観光場所などを一緒に見て回るよう提案した。

● 企業担当者の声

**円形劇場はアートだけの施設ではない
バランス感覚を持っていることが重要となる**



代表取締役 稲嶋 正彦氏

**戦後の施設不足を補うため
全国各地で建設された円形校舎**

戦後、教育基本法とそれに基づく学校教育法が施行され、小学校と中学校が義務教育となりました。しかし、1950年代になっても小、中学校では施設不足が深刻となっていたのです。そこで、狭い土地でも経済的に校舎を建設することを目的に、建築家の坂本鹿夫氏が円形校舎を考案。全国各地に建造されました。しかし、ベビーブームで生徒が増えていくのに対し、円形校舎の扇形教室では机の大量配置が難しく、建て増しも容易にできないことから、1960年代になるとほとんど新築されなくなりました。

倉吉市にある明倫小学校も坂本氏の設計です。1955年に建設されましたが、1976年に学校は新校舎へ移転。そ

採用前 **プロ人材を採用したきっかけ**

**アートに造詣が深いたけではなく
グローバルな視点を持ったプロ人材**

- 日本最古となる円形校舎の保存を訴えてきた稲嶋氏らは、株式会社円形劇場を設立。一旦は解体を決めていた倉吉市の市長は、同社に円形校舎の無償譲渡を決めた。同校舎を中心に街の観光名所として活用するため、フィギュアのミュージアムにする案が進むも、観光客を呼び込む上でも、まちづくりを進めることが必要であった。
- フィギュアを取り扱うということもあり、日本国内だけではなく、もっと世界に対する発信力を強化することが重要であった。

採用後 **プロ人材採用により得られた効果**

どんなプロ人材を採用？

- ニューヨークでの社会経験があり、門真アートプロジェクト（大阪府門真市）で実際に街づくりに関わったことがある。

プロ人材の活躍状況

- 円形劇場のプロデュースだけではなく、それに付随する街づくり推進のために、アート感覚を取り入れながら構想を練っている。

の後は中央公民館、倉吉ふれあい会館として活用していましたが、2006年をもって閉鎖され、翌年には市長が解体の意向を表明しました。

**観光名所がない倉吉市明倫地区で
市民の関心を集めて保存の声が強まる**

しかし、明倫小学校の円形校舎は、日本で3番目に建設され、現存する日本最古の貴重な建物です。明倫地区にはこれといった観光名所がありません。私たちは歴史建造物では京都や奈良に肩を並べることができませんが、たとえ昭和に建てられたものとはいえ、日本最古と呼ぶことができる建造物が明倫地区にあるわけですから、それを観光スポットに使わない手はないと考えました。そこで、円形校舎を保存するように訴えてきたのです。

2009年には明倫小学校の創立100周年を記念してパースデープロジェクトを立案し、円形校舎をパースデーケーキに見立てるイベントを開催。地元の人たちの関心も高く、保存を望む声が強くなりました。しかし、2014年5月には市議会で解体予算が可決され、執行凍結付帯決議も付いたのです。私たちは2015年に中心市街地活性化計画事業者登録を行い、保存に向けて市長に署名を提出。すると、市長からは非公式ではありますが、「実現可能なプランが示されれば、前向きに検討したい」との言葉をもらいました。


ちょうどその頃のことです。倉吉博物館でフィギュア展覧会が開催され、活況を呈しました。それをヒントに、円形校舎をフィギュアの制作工房にしてもらうことを思いついたのです。そして、フィギュアの企画・製造・販売をする大手企業に話をもちかけたところ、社長が円形校舎まで来てくれました。すると、建物の外部を見ただけで、「フィギュア博物館にしよう」との案を出してくれたのです。さらに、倉吉に工場進出していたフィギュアメーカーと米子に本社のあるフィギュアメーカーも加わり、3社共同でミュージアムのプランがスタートしました。弊社は2016年3月に株式会社円形劇場として設立。倉吉市議会では円形校舎の解体派と保存派が拮抗して揺れていましたが、2016年6月30日に市長が保存することを決断し、弊社への無償譲渡が決まりました。

**海外での社会経験を活かした
グローバルな視点に期待する**

この円形劇場は、ただ単にミュージアムにするだけでは

● プロ人材の声

**倉吉でしか味わえないオリジナリティを出して
世界に通用する価値観を生み出していきたい**



==== はしづめ まき氏

—この円形劇場の話聞いた時は、どう思いましたか？

正直なところ、倉吉市どころか鳥取県にも来たことがなかったので、「どんな所だろう？」というワクワク感がありました。私は今、地方から日本を変えていく時代に入っていると思っていたところでもあり、フィギュアのミュージアムというキーワードを聞いて、興味深く感じたのが率直な印象です。

—これまでも、まちづくりに関わってきたのですか？

もともとは、ニューヨーク工科大学や大阪芸術大学で建築学を学びましたが、2007年頃から都市をテーマにした現代美術を専門にしてきました。2008年にはUR都市機構と協働で門真アートプロジェクトを立ち上げた経験があります。このプロジェクトでは、商店街に日本全国から現代美術アーティストを一般公募で集め、空き店舗をアトリエとして活用。また、地元の小学生などがアートに触れたり体験できるように常時、ワークショップを開催しました。

—円形校舎を初めて見た時は、どのような印象を持ちましたか？

円形校舎は素敵な建物ですから、これは残していかなければ

ありません。日本最古の円形校舎をシンボルとして、まちづくりを進めていくことが重要です。倉吉には資金計画を立てる人や建築士はいますが、広い視野を持って街づくりの構想まで練る人材を見つけることは、難しい状況でした。そうした経験がある人材を探していたところ、とっとりプロフェッショナル人材戦略拠点の働きかけもあり、人材ビジネス事業者を通じて、はしづめさんと知り合いました。

これまでのキャリアを見れば一目瞭然ですが、はしづめさんはアート関係にも造詣が深い人です。一方で、アートに特化しているわけではなく、街づくりの経験も持っています。円形劇場はアートの観点も必要ではありますが、アートだけの施設ではありません。そのバランスが取れていることが大事だと考えていたので、はしづめさんはまさに打ってつけの人材でした。

また、はしづめさんはニューヨークや中国で居住した経験もあり、グローバルな視点を持っています。私たちにはない発想をどんどん投げかけてもらい、実現していきたいです。

はしづめさんは個人でデザインスタジオを経営しており、兼業としてプロジェクトに参画してもらっています。しかし、地方の中小企業にプロフェッショナル人材が入ること、その企業が経営的に成り立ち、その上で地方創生に繋がるまちづくりという観点からの人材活用になれば、プロフェッショナル人材が地方創生に貢献していく新たな姿になると思います。

ればいけないと感じました。周辺にも旧倉吉町水源池ポンプ室という歴史的な建造物があったり、古民家などもたくさんあり、感性を刺激されました。

—円形劇場を中心に、どのような街づくりをしていきたいですか？

円形校舎をはじめとして、いい素材はたくさんあるので、あとは倉吉の明倫地区に行かなければ味わうことができないオリジナリティを出していきたいです。そして、世界にも通用するような価値観を生み出していきたいので、どのように発信していくのかを模索しています。すでに、金沢21世紀美術館やアートの島と言われる香川県の直島町など、アートを基調とした街づくりの成功事例もありますが、倉吉からはアートだけではなく、日本の文化の発信基地となるような仕組みを作りたいです。まだ、企画段階ということもあり、稲嶋さんを中心にミーティングを重ねながら、構想を練っているところではありますが、他の仕事をしていても常に円形劇場のことが頭にあります。そこで導き出されたアイデアを少しでも形にしていけるように、今後も努めていきたいです。